「雑煮を食べながら～化身土という教え」

●「社員の雑談　企業が演出」

正月、雑煮(ぞうに)を食べながら、「社員の雑談(ざつだん)　企業が演出」という新聞記事(2021年12月7日、読売新聞)を思い起こしました。

記事によれば、コロナ下、人との対話が減ったことで、逆に日常の雑談を再評価する動きがあるといいます。そこで企業が、「雑談タイム」を導入したところ、社員は雑談をしなければとなって、かえって逆効果となったそうです。

その後、自由に雑談ができる環境をオンライン上や現実の職場に取り入れました。社員には、目的のない会話(雑談)は、仕事のアイディアが浮かびやすいと好評だそうです。

話しかけたい時に話ができる環境があれば、あとは自然の流れでいいということでしょう。

さて、この雑談の雑には色々なものが雑(ま)じっているという意味があります。新しいアイディア、つまり、今までなかったものは突然出てくるのでなく、雑談から生まれるという訳です。

●純粋さという危うさ

ノンフィクション作家の澤地久枝(さわちひさえ)さんが、軍国少女だった頃の自分を悔恨と共に振り返り新聞に思いを語っています。(2021年12月7日、東京新聞)

1941年12月、日米開戦の年、満州(今の中国東北部)にいた彼女は11歳、国民学校5年生、この戦争に勝つと素直に信じていた、いや、思い込まされていたといいます。

やがて兵器などの材料のため金属の回収が始まり、街の「ポストまで持って行くようじゃ、この戦争は負けね」という母親を「反戦主義者」「非国民」というような言葉で彼女はなじっていたといいます。その頃のご自身を次のように振り返っています。

「私のように、よく考えない、でも熱中する女の子は国家には都合のいい人間だったでしょうね」

日本の憲法を変えて戦争のできる国に向かう改憲勢力が国会議員の三分の二になろうとしている今、判断材料のない所に成り立つ純粋さや、思い込みの抱える危うさを教えてくれます。

それは、雑じりものはなければいいという単純な発想を超えて、雑じりけを抱えるかつての自分の姿を見つめることで、とても深い生き方が開かれるということかもしれません。

●不真実の私を通して

ところで、親鸞聖人の主著『顕浄土真実教行証文類』(『御本典』)を読んでいて、その「顕浄土方便化身土文類」(「化身土巻」)について、次のような素朴な思いを持ったことがあります。

『御本典』は、浄土真宗の教えを明らかにする経典などの引用と、宗祖親鸞聖人のご領解(りょうげ)(自釈)の部分から成り立ちますが、「化身土巻」にも膨大な引用があります。

それらの引用には、真実に基づかない生き方をしていると、虚仮(こけ)なるところ(化身土、真実でないところ)にその人が向かい、趣(おもむ)いていくということ、つまり、人間の迷った生き方、そして、人間を迷わす教え、思想について、繰り返し沢山の言葉が引用されているのです。

「化身土巻」の後半には、星宿(しょうしゅう)、いまでいう星座占い、方角占いについて相当な分量の引用がありますが、かつて若かった頃の私は、親鸞聖人という人は、なんてくどくど繰り返し引用をするのだろうと感じていました。

ところで、浄土真宗本願寺派の『教章』(1967年)には、「深く因果の道理をわきまえて、現世祈祷(げんせきとう)やまじないを行わず、占いなどの迷信にたよらない」という印象的な言葉が使われていたことを思い出します。

因果の道理をわきまえるということと、まじないや占いが、セットになって掲げられています。つまり、これらは、別々のことではないということですね。

繰り返し、繰り返して、真実でない自分、迷信を気にして、占いなどをたよりにする姿を見つめること(化身土なるあり方)を通してのみ、今まで気づかなかったこと、まことの道理、真実(真実報土という浄土の生き方)に気づかされる世界があるということでしょう。

しかも、雑(ぞう)に対して、正(しょう)といいます。雑じるというからには、そこに正なるものがない訳ではないのです。しかし、何が雑じりものか、不真実なるものかを見届ける確かな導きとなるものに出遇うことが肝要ですね。

雑煮を食べながら考えてみたのですが、色んなものを食べながら考えていきましょう。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます(会費はいずれも資料･茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。